

特集 「民族」に寄せて

吉 本 道 雅

史学研究会では、二〇〇六年より春の例会を復活し、旧史学科八専修（日本史・東洋史・西南アジア史・西洋史・考古学・現代史・二十世紀学・地理）に推薦いただいた講師の方々に研究発表をお願いし、それに基づいて翌年の一号に特集号を編むこととしている。二〇〇六年「国境」・二〇〇七年「モノユメント」・二〇〇八年「環境」・二〇〇九年「戦争」といった共通テーマを設け、異なった専門からそれぞれの立場でお話しただく。講師それぞれのテーマ解釈の相違があり、テーマの多面的ひいては総合的理解にまことに有益である。二〇一〇年四月一七日の例会では、「民族」を共通テーマとした。講師の方々に加えて、若干名の方々に寄稿をお願いし、ここに特集「民族」を上梓する次第である。

日本語の「民族」に対応する概念の一つにネイション nation がある。一九世紀ヨーロッパに発祥する「近代」においてネイションはネイション・ステイトを随伴し、大学というかたちで制度化された学問体系において、人文学とりわけ歴史学はネイション・ステイトを正当化する装置として機能し、歴史教育はネイションの再生産を担ってきた。一九七〇年代以降、「近代」の限界性が少なくとも学問の世界では常識化し、歴史学においてもナショナル・ヒストリーの克服が叫ばれるようになった。ところが、現実の世界では、一九九〇年代以降、東西冷戦の終結によって、封印されてきた民族問題が噴出することになった。

日本においてとりわけ懸念となるのは、中国の民族問題である。社会主義崩壊後の統合理念として「中華民族」を標榜するナショナルイズムが前面化し、それがチベット・ウイグルなどの「少数民族」との軋轢を高め、あるいは昨今の尖閣列島問題のように近隣諸国との摩擦を生じている。

歴史学は、このような事態に即効性のある提言をなすことには不向きである。しかし、ただか二〇〇年の「近代」を相対化し、過去を遡って問題の本質を解明し、次の世代によりよい未来を築く手がかりを提示しうるのは独り歴史学のみである。このような抱負のもと、特集「民族」を編むこととなった。

上述の如く、例会・特集号においては、多様な解釈をもたらしうようなテーマを意図的に選択しているが、今回の特集号「民族」に寄せられた一〇本の論稿では、それがことに甚だしい。

石村論説は、オーストロネシア語族の拡散・オセアニアにおける新石器文化成立の担い手とされてきた「ラピタ人」の実態を、考古学の立場から論ずる。「民族」の科学的定義に関わる近代以降の研究史が手際よく整理され、言語学や形質人類学をも援用する最新の研究方法が披露される。特集号「民族」の巻頭論文にふさわしい論説である。

青銅器時代に入ると世界の各地で「文明」が発生し、「国家」が形成される。エトノス *ethnos* としての「民族」は、先発的に形成された「文明」の立場において、「われわれ」とは異質な「他者」の諸集団として記述される。中国においては、前三世紀までに、今日の中国本土が「中華」として一定の均質化を遂げ、周辺「他者」諸集団を「四夷」とみなすようになる。だが、以後の歴史は、「中華」に対する「四夷」の同化として単線的に推移したわけではない。山崎論説は、一四〜一六世紀の広西を舞台としたエスニック・グループの「異化と同化」を論ずる。今日の中国における「少数民族」政策を歴史的に理解する手がかりともなりえよう。

「四夷」のあるものは、中国をモデルに「国家」を形成し、同様に周辺「他者」との関係を構築する。竹森書評は、隼人に焦点を当て、四〜一二世紀のヤマト政権と南九州の関係を通時的に記述した永山修一の著書を扱う。

「文明」とそれに対峙する周辺「他者」諸集団といった構図は、もとより「文明」の側の一方的な饒舌に支えられているのであり、「他者」がそれ自身の歴史記述を提示した場合、その非対称な言説構造はただちに相対化される。岩尾研究動向は、チベット最古の歴史文献である『バシエ』を扱う。不幸にも自らの歴史記述を遺しえなかった周辺「他者」諸集

団は、「文明」の側の言説に翻弄されることになる。高句麗遺跡の世界遺産登録に関わる中国・北朝鮮の角逐、高句麗・渤海の歴史を自国のナショナル・ヒストリーに取り込もうとする中国・韓国の論争は記憶に新しいが、歴史的に形成された今日のネーション・ステイトの領域を超時代的に前提し、その領域の辺境に住む諸集団の歴史を「国内少数民族」のそれとみなすアナクロニズムに他ならない。琉球・アイヌの歴史を「日本史」というナショナル・ヒストリーに当然の如く取り込んで疑わない日本の検定教科書、それによって培われた日本人の歴史認識も同様の問題を抱えている。

前近代のエスニック・グループに関する言説が、近代以降のナショナル・ヒストリー構築に際し様々に利用されることは、中国を中心とするユーラシア東部だけの問題ではない。高田書評は、社会史・人類学的方法論によってナショナル・ヒストリーのバイアスを拒み、一一〜一四世紀の東地中海における「民族」の実態に迫ったS. A. Eastelの著書を扱う。

「文明」が「他者」としての諸民族に対峙することは、前近代だけの問題ではない。帝国主義列強の従属民族に対する植民地支配はその典型である。堀内論説は、大英帝国を構成した南アフリカ連邦の一九二〇〜三〇年代における「カラード」の推移を論ずる。カラードの「文明性」に白人との共通項、アフリカ人に対する優越を主張したイギリス系リベラル派歴史家の言説が分析される。山口書評は、一九五〇〜六〇年代における大英帝国の解体と脱植民地化に関する北川勝彦の編著を扱う。

今日の大方の日本人はすでに忘却しているであろうが、一九四五年までの日本もまた紛うことなき帝国主義列強であった。黒岩論説は、「語学道楽」に生涯を費やした宮武正道の評伝だが、宮武がパラオ語・マレー語・タガログ語を「道楽」の対象としたことは、複数の従属民族を擁したかつての日本のすがたを端的に象徴するものである。

ネーションの訳語の一つに「国民」がある。酒井論説は、一九二〇年代における「国民外交」の破綻、すなわち、諸「国民」の平等を前提とした国際協調主義が、日本「国民」の利益をもつばら追求するエスノセントリズムに変質した過程を論ずる。

「民族」が自明の存在ではなく、歴史的に語られ、あるいは形成されてきた存在であることはや明らかであろうが、その形成は今日でもなお進行中である。禪野論説は、メキシコシティにおける現地調査を踏まえ、「先住民」indigenaと「地元民」nativoの実態を文化人類学の立場から論ずる。

今回の特集号は、「民族」に関連する歴史学ないしそれに近い分野の研究の最新動向を反映したものである。しかしながら、時代・地域・方法のいずれについても、「民族」を対象として実践しうる歴史研究のごく一部しか紹介しえなかったことも一面の事実であろう。「乃公出でずんば」の感を抱かれた読者諸賢におかれては今後の寄稿を御検討いただきたい。

(二〇一〇年一月七日)

(史学研究会編集担当常務理事 京都大学大学院文学研究科教授)